火山噴火予知連絡会幹事会　議事録

日　時：平成16年1月27日11時00分～12時35分
場　所：気象庁防災会議室
出席者：会　長：藤井（敏）
　　副会長：石原
　　幹　事：岡田、植木、渡辺、平林、藤井（直）、上総、大城（文科省：代理）、山本
　オブザーバー：土井（東大震研）、平（内閣府）
　　事務局：竹内、山里、小泉、菅野、白土

前回議事録について

・承認済みの前回議事録を配布。

1.　富士山ハザードマップの検討状況について

秋に富士山ハザードマップの関係者に意見を聞いた。現在最後の修正作業に入っている。3月初めに検討委員会を開催し、年度内にまとめ富士山火山防災協議会へ報告する予定。（内閣府）

＜質疑＞

特になし。

2.　三宅島帰島プログラム準備検討会の動き

昨年10月から、東京都、三宅村、内閣府で検討をはじめ、昨年12月25日に中間報告を行った。検討会では、安全、基盤、生活の3つの分科会を設置して検討を行った。今年3月までに取りまとめる予定。安全分科会では、火山ガス監視・観測体制の強化、火山ガス情報を個々の家に島内一斉に伝達するための防災無線の整備、ハイリスク者等に必要な避難体制の整備。基盤分科会では、泥流対策のための砂防ダム整備、橋梁工事等の交通の確保、治山、林道・森林の復旧、農道、農業用水路施設の復旧等の生産基盤施設の整備。生活分科会では、融資・利子補給等の災害者生活再建支援、福祉施設、学校等の再建整備、住宅の建設・補修等に係わる融資・利子補給の実施や災害廃棄物の処理など生活環境の整備を行っていくことが決められた。（内閣府）

＜質疑＞

・火山ガス、噴火については、どのような前提になっているのか。
・噴火は激しいものはないという前提、ガスは少しずつ収まっていくことが前提で検討を行っている。この件に関して、特に明文化してはいない。

3.　三宅島火山活動モデル検討会報告

昨年12月26日に1回目の三宅島火山活動モデルの検討会を開催した。特に火山ガスの消長に注目して検討した。当初の予定より多くの方が参加した。検討会では、2000年以降の三宅島～新島・神津島周辺の火山活動及び脱ガス・マグマモデルのレビューを行った。複数の機関がばらばらに行っていた、地殻変動のデータからのマグマだまりの定量的な解釈を、整合できないかが話題となり、今回の予知連では、防災科研と地理院が合同でまとめた資料を作成した。

今後の検討事項は

・地下のマグマだまりの大きさを把握する。
・マグネ等や自然地震。
・山頂近くでの地殻変動のデータが必要だが、まだ具体的にはなっていない。
・水準測量を加えられるだろうか。

具体的な結論は得られなかったが、何をやればいいかを決めて本日の本会議に臨んだ。(事務局)

＜質疑＞

・マグマだまりは、地震で捉まえられないのか。

・気象庁と地震研との共同で検討を行い、いくつかの方法が検討されている。観測データがあまりよくないので、苦労している。

4. 三宅島総合観測班の活動状況について

・火口縁南側 150m 付近から火山ガス採集用パイプを設置、火山ガス採集分析を実施（東工大)。平成 14 年 4 月に、東京都及び気象庁が協力して設置、切断され、9 月に再設置後機器故障のため休止中。平成 16 年再開予定。

・昨年度山頂に近い地点に全磁力の観測点を移動した。今年度内に火口カメラを山頂付近に設置する予定。帰島が本格化するのを念頭に置いて、地権者との調整等もお願いしているところ。気象庁も臨時に設置した観測点の移設再配置年度内を目途に検討している。(事務局)

＜質疑＞

特になし。

5. 火山活動度レベルの導入について

レベル化は、浅間山（レベル 2)、伊豆大島（レベル 1)、阿蘇山（レベル 2)、雲仙岳（レベル 1)、桜島（レベル 2) として、11 月 4 日から 5 火山で運用をはじめた。阿蘇山は、今年 1 月 14 日の土砂噴で、レベルが 2-->3 へ上がった。今後 5 年を目途に常時観測火山等 25 火山について、来年度から準備の進んでいる火山から火山活動度のレベル化を行う予定。早ければ今年の秋に実施。今後ともご協力をお願いする。(事務局)

＜質疑＞

・今年の秋の実施は、部内試行か。

・部外に出すことを予定している。

・早めにレベル化を行い問題点を探るべき。

・外に出すかどうかは別にして、火山センター内部では、その他の火山も一気にレベル化を行ってはどうか。

6. 日本活火山総覧第 3 版編集の進捗状況について

活火山総覧は、前回の第 2 版は平成 3 年に作成し、その後、活火山の追加、活火山の定義の変更等があり、第 3 版を作成することとなった。活火山総覧第 3 版の火山活動について、素案が完成したので配布。内容についてのご意見は、後日、作成担当であるアジア航測から、関係する委員の方へ意見照会を行うので、ご協力をお願いする。今後の予定は、本編の内容について、年度内に作成し、来年度に出版する予定。(事務局)

＜質疑＞

・噴火があったかどうかの怪しい記載「?」については、どうするのか。

・出来る限り出典を明示する。

・火山学会で火山資料の特集号を 2 回出しているので、整合をとる。

・記録に残る有珠山の噴火は、8 回ではなく 9 回である。

・理科年表と活火山総覧の記載について、整合を取る必要がある。

7. 火山噴火予知連絡会 30 周年記念事業について

火山噴火予知連絡会は、昭和 49 年 6 月に発足以来、30 周年を迎える。平成 7 年 3 月には、20 周年を記念して「火山噴火予知連絡会 20 年のあゆみ」を刊行した。その後、有珠山、三宅島の噴火、岩手山の火山活動等があり、火山噴火予知連絡会は、引き続き我が国の火山防災にとって重要な役割を果たしてきた。会長及び副会長と相談した結果、前刊の「あゆみ」の続編として、以下の内容で「最近の火山噴火予知連絡会 10 年のあゆみ」(仮題) を、火山噴火予

知連絡会会報の特別号として刊行することとしたいがいかがか。（事務局）

1　序
2　最近の火山噴火予知連絡会の動き
3　最近の全国の火山活動
4　最近の主な火山活動と火山噴火予知連絡会の活動
5　ワーキンググループの活動
6　10年を振り返って（井田前会長）
7　火山噴火予知の進展と今後の展望（藤井会長）
8　資料集

なお、執筆は、6、7を除き、主に事務局が担当し、関係する委員に意見照会することとする。

＜質疑＞

・修羅場にあった人たちの手記は、後で読まれることが多いので、掲載しては。
・今回は、資料集としての意味合いで16年度末までに作成しようとしている。
・編集方針がこれまでとは違うが、それでよいのか。
・あくまでも提案で、幹事の総意として手記が必要となれば掲載する。
・火山噴火予知連絡会として、関連する行政機関から一言もらっては。
・2の「最近の火山噴火予知連絡会の動き」で、各機関ごとに短く最近の10年の動きをまとめる。
・大学は、予知協議会の議長にまとめてもらう。
・第6・7次噴火予知計画の建議を入れる。

8.　連絡会会議の効率化について

今回から席上資料を火山ごとにまとめるため、早段階での電子媒体での資料提出を行った。今後もご協力をお願いする。これにより、会議での資料検索の時間を節約する。統一見解及び全国の火山活動の細かな表現については、本会議後に関係する委員により検討することとする。

＜質疑＞

・電子媒体資料の作成要領に、マージン等の指定を追加して欲しい。
・今回は時間が無かったので、細かな点については記載しなかったが、次回までに要領に入れる。

9.　その他

＜噴火の定義について＞

・噴火は、学術的なものに近づける必要があり、次回の予知連までに気象庁がとりまとめる。
・噴火定義は各火山でまちまちであったが、今後検討していきたい。少なくとも火山学的に噴火とするような現象を「噴火ではない」といった説明は混乱を招くと考える。

＜今後の定例会の予定について＞

・これまで2,5,10月に開催していたが、1月から2月中旬まで大学は忙しいので、3月上旬ぐらいに変更したい。また、5月と10月は期間が空きすぎるので、6月に変更したい。
・今後は、6月末、10月末、2月末から3月初めで調整を取りたい。

＜三宅島統一見解について＞

原案どおりで連絡会に提案することで了承。

＜WOVO のデータベースについて＞

・クリスニューホール氏から、パラメータの照会がきた。気象庁では、どのようなデータベースがあるか回答を準備している。

・データベースを作るのは良いが、アップデートしていくには、組織と金が要る。